

第 51 回 奈良県河川整備委員会 議事概要

1 日 時：平成 21 年 5 月 19 日 9 時 30 分～12 時 10 分

2 場 所：猿沢荘 3F わかくさ（奈良市池之町 3 番地）

3 出席者

委 員 10 名：朝廣佳子、池淵周一、伊藤忠通、岩本廣美、谷幸三、
中川一、中島祐子、前迫ゆり、三野徹、和田萃（五十音順、敬称略）

事務局 4 名：奈良県 大堰河川課長 ほか

4 議事要旨

- (1) 第 50 回奈良県河川整備委員会議事概要の確認
- (2) 第 50 回奈良県河川整備委員会補足
- (3) その他

5 議事内容（主な意見）

5. 1 第 50 回奈良県河川整備委員会補足について

- ・宇陀川は動植物、昆虫類が多様であり景観も良好である。今、私たちが色々な問題に取り組むことで次世代に受け継ぐ事が大事である。今後の環境学習の一助になるような整備を進めてほしい。
- ・個別の生物相は豊かであり、河川の役割として山林や集落、農地等をつなぐネットワーク性が非常に大切である。河川整備では限界があるが、もう少し広範な土地利用等を含めた中で河川の果たしている生態系の回廊的役割にも配慮することで新しさが出てくると考える。
- ・宇陀川の対象区間では「哺乳類・は虫類の確認種なし」とあるがいないことはない。河川を考える上では、治水・利水に加えて生態系の確保あるいは文化性とか風土ということが重要な要素になるので、生物相の的確な調査をしてほしい。
⇒例えば宇陀川については下流から全区間調査しており、調査時期は極力、四季を通じて実施しているが、記載している生物は事業実施区間の 425m 区間で確認したもののみであるため、「確認種なし」になっている。配付している河川環境情報図に記載しているように他の区間では哺乳類やは虫類を確認している。
- ・河床を広げ、その中で瀬・淵を確保しようという計画であるが、河床を広くとったところで在来種の植生再生というのが為されるのか、非常に疑問である。

- ・環境指標生物の貴重種や駆除しなければいけない特定外来種などのすべての生物を総合的に見てどう配慮するか。現実には「生物に配慮する」と言っても配慮した工法になっていないことが多い。

⇒例えば宇陀川の連続性については、現在の事業実施区間には3メートル落差の固定堰があることにより連続性が分断されているが、固定堰を解消し本来の勾配を連続的に設けるなど、隔たりのないような縦断勾配の設定等を考えている。また、横断形については、掃流力のチェックにより河床の土砂移動も確認できており、瀬・淵等の形成により上下流のような現在の環境を確保したいと考えている。さらに、河床幅を極力確保し良好な水辺環境を川の中で設けたいと考えている。しかし、様々なことを踏まえてどういう整備を実施していくかについては現時点では難しいところもあり、詳細設計を実施するには先生等のアドバイスをいただきながら実施したいと考えている。

- ・山田川の整備済み区間の環境の現状について、約20年が経過し良くなったという書き方をしているが、駆除しなければいけない特定外来種ばかりになっている。これは植生や動物の立場からみて良くない環境であるので、違う表現にした方が良い。また、工事に際しても生物を分かっている者に具体的に相談し、きめ細かな配慮をしていかないと生物は残らない。

⇒外来種対策については、植生管理手法や整備後のフォローアップ等について、専門家に相談しながら研究・勉強していきたい。

- ・河川整備をするときに利水も考える必要があると思うが、県内の河川で農業用水や利水の部分が多い流域ではどう考慮されているのか。現在の取水量が考慮されていると考えればよいか。

⇒取水地点では、現在の取水量を復元することを考えている。宇陀川の整備区間では固定堰が1カ所あるが、河道改修後に可動堰を再度設置し取水量を確保することを考えている。

- ・宇陀川上流域の松山地区と下流の平尾の水分神社付近の水質を比べてみると下流の方が清流ではないかという印象を持っている。大宇陀の町並みの下水がかなり流れ込んでいるのではないかと。大宇陀の汚水の処理はどうなっているのか。

⇒宇陀川流域では、宇陀川浄化センターが稼働しており、過去には清流ルネッサンスに取り組み、下水道の進捗により水質はかなり改善してきている。旧大宇陀町エリアの下水道普及率は約60%まで上がってきており、公共下水道への接続が進めばさらに改善される。

- ・宇陀川の整備に当たり、護岸については新たに生物の生息に配慮した工法として、自然石などの活用により落ち着きのあるものとするがあるが、自然石を使った護岸というのはどういうものなのか。昔からある「蛇かご」を岸边に置いた方が生物に良いのではないかと。

⇒上流の松山地区にある自然石による護岸のイメージを踏襲し、景観的にも馴染むような形で石積みをしたい。また、一定の掃流力で河床が変動するという条件を与えることで、自然に土砂が溜まる場所、瀬や淵になるところができてくるという川づくりの方向が国からも示されているところであり、そういう方向で取り組んでいきたいと考えている。

- ・生物の立場からみると、石積みのところに植生が生え色々な生き物が棲めるのが理想的である。ただし、自然石もその地域のものを利用するというやり方が良い。
- ・直線河道において川の持つダイナミズムに任せて河床変動や深掘れ、砂州、ワンドの形成を期待するのはなかなか難しいのではないかと考える。一部で川の幅を広げて掃流力を落とすと、土砂の溜まる場所ができることで迂回する流れや深掘れする場所ができたり、少し蛇行させることで湾曲部の外岸が掘れたりといった多様な河床形態が形成されるのではないかと考える。直線河道は部分的に拡幅するなど工夫が要るのではないかと考える。また、中小河川で河道内に蛇かごを置くのは洪水時に阻害になり、河床が変な動きをしてしまうこともある。低水路の中に置く場合には気を付けた方がよい。
 - ⇒現状は、平面形も大きなS字が入っており、落差工も設けるため変化が起こると考えている。堰付近の縦断についても、前後の平均的な勾配に戻すことで松山地区付近の縦断勾配になり、平面形も緩く蛇行している状況なので、ある程度流れの変化ができると考えている。また、フォローアップ等を実施していかなければならないと考える。
- ・川には早瀬・平瀬・淵というのがあり、早瀬だけに棲む種類、平瀬に棲む種類、淵だけでしか棲めない種類がいる。川の中に多様な早瀬・平瀬・淵の環境があれば多種類の生物が棲める。そういうことも考えてほしい。
- ・町並川については、町並みの中を通っている川の河床を掘り下げるといった計画であるがどういう形で実施するのか。また、地元の方々に工法が実際に提示されたのか。それに対して地元の方々はどのような反応を示しているのか。
 - ⇒現況の石積みの根入れを有効に活用し、ぎりぎりまで川底を下げるといった対策を提案して地域の方には合意を得ている。さらに、当面の対策だけではなく抜本的な対策の要望もあり、その中で現状の建物を保存するような要望もあることから、今回バイパス案を考えた。
- ・山田川では河道を完全に替えてしまうため、集落の中を流れていた川自体が完全に住民のものでなくなるということで、住民にとっては大きな変更を迫るものである。住民が本当にそれを望んでいるのであれば異論を差し挟まないが、その点についてはこの委員会としては大きな決断・判断を迫られる問題であると考えている。
 - ⇒集落の中を流れる現況河川の排水機能は必要であり、現状のような形で残すことになる。山田川の付け替え部分は直線的な河道になるため、変化を持たせるために落差工下流に深掘れを設けるなど縦断的な工夫を検討していきたい。
- ・山田川は将来の開発を見込んで市街地の流域面積比を80%としているが、将来の開発というのはどのような根拠で出しているのか。
 - ⇒山田川流域の市街化面積については既存の開発計画、あるいは市街化区域について市街化が進むということ想定し設定している。流域で計画されている開発がすべて行われても、川としては大丈夫という受け皿を造る計画としている。

- ・色々な計画が頓挫あるいは削減される時代に入っている中で、どこにどういうものが計画されているのか、マップなどを用意してほしい。
- ・奈良県降雨強度式は奈良気象台と八木観測所のデータをもとに相関を分析し、淀川水系では補正係数 1.3 をかけることになっているが、その分析した結果を示してほしい。
- ・流出計算は合理式でやらざるを得ないだろうが、洪水到達時間内の平均降雨強度が物理現象的な意味合いから出てきているキネマティックウェーブ法でも算出し比較してほしい。
- ・今後のスタンスとしては、素案を作成し、これを地元を下ろして意見を聴取し、それをまたフィードバックしていくといったプロセスについて、従前と同様に進めさせてもらいたい。
⇒次回は、これまで環境の配慮事項や治水の考え方等、いただいた意見を反映した原案についてご意見をいただきたい。ある程度合意いただいた段階で住民の意見聴取を行い、その後、住民の意見の反映について委員会で審議していただき、最終的には市町村長の意見聴取を実施した上で、年度内に国へ申請することを目標に進めていきたい。
- ・次回は、本日の指摘のあった事項を踏まえた原案を提示していただき審議したい。

(以上)